優秀賞　高学年の部

お母さんありがとう

滋賀県　甲賀市立雲井小学校 五年　宝田 杏優

　赤ん坊の頃から私は母と二人っきりで暮らしています。小学四年生の終わりまで学童保育があったので、学校が終わってから夕方まで母がむかえに来てくれる間、友達といっしょの時間を楽しく過ごしました。でも、五年生の春から、学童保育に行けなくなり私は、かぎっ子になりました。最初一人でいる時、不安とさびしさで母の帰りを待ちどおしく感じていました。しかし、日がたつにつれ、不安な気持ちもうすれ、宿題をしたりテレビを見たりとひとりで過ごす自由な時間がかえって楽しく感じるようになりました。

　そんなある日のことでした。おなかがすいてラーメンでも食べようとなべに火をかけてしまいました。母と一緒の時には、料理の手伝いもしている私でしたが、「一人の時は火を使ってはだめだよ」と日頃からきつく注意されていました。でもその時はテレビに夢中になって火を使っていることをすっかり忘れてしまったのです。それからどれくらい時間が過ぎたのかよく分かりませんが「あっ」と思って台所に走っていった時には、なべの湯がなくなって底が真っ赤になって今にも燃え上がりそうでした。母にしかられるという思いで頭の中が真っ白になってしまいました。夕方母が帰ってきて穴のあいたなべを見たとたん、私が母との約束をやぶって火を使ったことを知られてしまったのです。

「何でお母さんの言うことを守らんの!!」「火事になったらどうするの!!」と大声で私をしかりました。私はすべて自分が悪いのだから一言、ごめんなさいの言葉を言えばよかったのに、思わず「ひとりにするからや!!お母さんが家にいないのが悪いんや!!」思ってもいない言葉がつい口から飛び出しました。あっ、ぶたれる。と思ったしゅん間、母は「そうやな、ごめんなあゆちゃん、お母さんが悪いんやな…」とさびしそうな顔で答えました。そして「けがしなくて良かったわ」と。その後いつもと変わらない夕食の時間が始まり、その日は過ぎていきました。

　それから何日か過ぎたある日のこと、おじに連れられ母の仕事場へ初めて行く事になった私がその時目にしたのは、汗とほこりにまみれて一生けん命働く母の姿でした。私のためにずっとずっと父親代わりも続けてくれた母の姿です。私を見つけて、にっこりとほほえんでくれた母に私は思わず走りよってだきつきました。何だかすごくうれしくて温かくて自分のわがままをはずかしく思う気持ちと共に「お母さん大好き、いつもありがとう」と口からでていました。